

「らしさ」考

—「敦盛最期」、「木曾最期」の実践から—

古田 尚行

1 はじめに

「〇〇らしさ」とは、日常でよく使われることばの一つである。女らしさ、男らしさ、子どもらしさ、大人らしさ、高校生らしさ、日本人らしさ、あなたらしさ、自分らしさ……。私たちはこのような「らしさ」を個性を認識する手段として使い続けているし、他者を理解するために、あるいはじぶん自身を理解して、評価していくために必要としている。殊に教育の場においては「らしさ」を求めてしまいがちである。教員や親から「あなたらしく」振る舞うこと／振る舞ってはいけないことが強要され、かたや「子どもらしく」、そして段階に応じて「大人らしく」振る舞うことが求められていくし、我々も求めている。こうした従順な主体の育成を通じて教育制度は社会に適した人材を送り込んでいくわけである。¹

しかし、こうした「らしさ」自体がもつ危うさもまた感じることもある。「らしさ」が自動的にひとの認識を取り決め、自らの行為を方向付けていくことがある。「らしさ」は社会的なものでもあり、たとえば、生物的には「女」と認定されていても、「女らしく」振る舞うことに抵抗してしまうことがある。ひとは「らしさ」を身体化することで社会に適応していくことになるともいえるのであるが、自らが所属している社会的文化的な世界を相対化せず生きていくことと、そのことを一端考えた上で引き受けていくこととは大きな差がある。

そこで、『平家物語』から「敦盛最期」と「木曾最期」を主に扱い、学習者が「らしさ」についてどのように向き合っていくかを考えることを目標として授業を行った。²

2 「敦盛最期」、「木曾最期」の実践

今回取り上げた「敦盛最期」と「木曾最期」は、ひとは複数の「らしさ」を持ち、時に齟齬が生じることがあるという事例である。

「敦盛最期」では、名誉を得るために大將軍の首を討ち取りたいという「武士らしさ」を持った直実が、いざ目の前の大將軍の首を取ろうとして顔を見たところ、突如自身の子と面影が重なって、「親らしさ」が生じてしまった例である。³ 直実の「武士らしさ」と「親らしさ」という二つの「らしさ」の葛藤を描いている。一方の大將軍である敦盛は、「大將軍らしさ」を最期まで全うした人物でもある。この直実の事情は、たとえば、ある女性の中に「女らしさ」と「妻らしさ」とがあって、それらは普段は両立しているが、ある局面になると衝突するという構図に似ている。

「木曾最期」では、敦盛と同様に大將軍である義仲の、幼少期から一緒に生きてきた乳母子である今井兼平に対する情と、大將軍としての立場との間に生まれた葛藤に揺れ動く姿が語られている。

いわゆる「武士らしさ」という点からは、義仲は自害ができずに敵に討ち取られてしまい（不名誉な死）、兼平は「日本一の剛の者の自害する手本」として自害をすることができた。義仲の方は、「武士（大將軍）らしく」ない、と判断ができそうである。そのため、義仲に対する評価は、「武士らしく」ないということで終わってしまいそうではあるが、「らしさ」を強要されながら「らし

く」生きることができなかつた人間に対する評価はそのような皮相なものでよいのだろうか。大將軍としての立場と、兼平と一緒に死にたいという情との間で揺れ動いた義仲の生き方を見つめることで、学習者自身がどのように義仲を評価するか。そして、「らしさ」とひととの関係を学習者がどのように考えるか、肯定していくか否定していくか、そのことも含めて、授業の中で考えさせて、まとめとして「らしさ」をテーマとして学習者に考えを叙述させた。

なお、これまでの教育現場での「木曾最期」の扱われ方の全てを述べることはできないが、義仲と兼平との主従関係や当時の武士観を中心に読み解くことが主流であるとおもわれる。⁴ただ、近年ではカノンとして形成された古典、そしてそのことを前提とした古典教育に対する議論もあり、テキストの持つ権力性やイデオロギー性を無批判に教育現場で受け入れて再生産をしているという批判もあるが、授業ではこれらの点に注意しながら教材を扱っていった。⁵

2—1 授業の実際①（「木曾最期」の読解まで）

○教材テキスト

「敦盛最期」（『ビギナーズ・クラシックス平家物語』角川ソフィア文庫を編集したテキスト）

「木曾最期」（『探求国語総合古典編』桐原書店）

○日時 1月～2月上旬

○対象 安田女子高校1年生2クラス（各40名）

○授業展開（全12時間）

- ①身の回りの「らしさ」の記述・発表…1時間
- ②「敦盛最期」読解…2時間
- ③「木曾最期」の読解…6時間
- ④義仲の評価、ならびに「らしさ」についての記述・発表…2時間
- ⑤全体的なまとめ、「らしさ」考の完成…1時間

①身の回りの「らしさ」の記述・発表については、導入として、以下の課題を与えた。

課題1 身の回りにある「〇〇らしさ」と思いつくものをあげてみよう。

課題2 あなたの中にある「〇〇らしさ」には、どんなものがあるだろうか？

課題3 「課題2」の「〇〇らしさ」は、あなたにとってどのような意味（長所・短所含めて）があるだろうか？

課題1 で出てきたものは、「人間らしさ」、「自分らしさ」、「あなたらしさ」、「子どもらしさ」、「大人らしさ」、「女らしさ」、「男らしさ」、「日本人らしさ」、「外国人らしさ」、「(女子) 高校生らしさ」、「アイドルらしさ」、「動物らしさ」などである。

課題2 で学習者があげたものは、「自分らしさ」、「(女子) 高校生らしさ」、「女らしさ」、「日本人らしさ」が多かった。

課題3 では、次のような意見が見られる。

A 「自分らしさ」は素の自分、自分もっている全てのものが出せていいと思います。性格がすぐに出るし、その人の性格がなんとなくわかるので、自分のことを知ってもらいたい機会だと思

います。女らしさ、男らしさというものは、女は女、男は男というように定着しているから、男→女らしさ、女→男らしさをもっていたら、差別とかにつながっていくのでは？ 人間の短所になると思います。

B自分らしさは誰かにしばられず、自分の個性をしっかりと出し、自分の行動を信じることだと思う。が、周りの事もちゃんと見なければ自分勝手にもなってしまう。ただ自分らしさを失えば周りに流され自分の意志をつきとおす事が出来なくなってしまう。だから自分らしさは私には必要だ。

C自分のことを指し示すもの。自分の性格や姿をさすから、他者から見た自分の姿が明確になる。

A、Bのように「自分らしさ」に言及する学習者は多かった。「らしさ」と個性とを結びつけている。「素の自分」、「本当の自分」、「自分を信じる」という言葉が使われる傾向があり、確固たる揺れ動かない自己があると考えている学習者は多い。

しかし、Cのように他者との関係の中で見つめることのできる学習者もいる。これは、入学当初からの現代文の領域で自己論、他者論の問題を扱い、さらに11～12月には言語学の基本的な議論、そしてジェンダー論や社会構築主義の議論などを学んだためである。⁶

②「敦盛最期」読解であるが、本校は中高一貫校であり、2年生の時に授業で取り扱ったので内容はほぼ覚えている。ここでは、「武士らしさ」(直実)、「親らしさ」(直実)を軸に読み解いて整理し、また「大將軍らしさ」(敦盛)も確認をした。具体的には自分の死が決定となった場合に見苦しい姿を見せずに「とくとく頸をとれ」と発話させる「大將軍らしさ」。そして、そうした姿を見て、直実の中にある「武士らしさ」と「親らしさ」との衝突、葛藤が生まれたということをおさえた。⁷

③「木曾最期」の読解では、まずは義仲の語り方が敦盛の語り方に似ていること(装束の様子)、名乗りを行っていること(武士としての姿)をおさえた。

そして、巴との別れに際しては、「おのれは、とうとう、女なれば、いづちへも行け」と発話をしている義仲は、なぜこのように発話したのかを問うた。すると、学習者の中には「大切な女性だから」、「愛している女性には生きて欲しいから」という意見が出てきた。

義仲の発話の意図はすぐ後に「木曾殿の最後の戦に、女を具せられたりけりなど、いはれむこともしかるべからず」とあり、自分の「最後の戦」に「女」を「具せられたりけり」と敵に言われるようなことがあれば、それは「しかるべからず」というわけである。ここにも「武士」の論理が現れていると見てもよいであろう。⁸ 学習者の読みが異なるものとなったのは、巴と義仲という関係を現代的な恋愛のコンテクストに当てはめたからだと考えられる。⁹

「木曾最期」の読解では、「武士らしさ」を中心としながら義仲や兼平、その敵などの行動を理解していくことにした。

2—2 授業の実際②(義仲の評価)

④義仲の評価、ならびに「らしさ」については問いを与えて記述させ、発表させた。この発表は、研究授業の日(2013年2月5日)に行ったものであり、授業者が指名して学習者に読ませ、適宜授業者がコメントをしながら展開していった。その際に留意した点は、それぞれの学習者が抱く

「らしさ」観を明確にして次につながるように配列し、「らしさ」をめぐる問題領域を広げ深めていくということである。

課題1「木曾最期」を読んで、木曾義仲をどのようにあなたは評価するか。記述せよ。

課題2「木曾最期」を読み終えて、あなたの身の回りにある「〇〇らしさ」を取り上げて、あなた自身どのようにして受け止めていくか、考えるところを記述せよ。

課題1で学習者が記述したものをいくつか引用する。

A私は義仲は〈大將軍〉らしさや〈男らしさ〉はあるけれど、どちらもつらぬきとおした人だとは思いませんでした。兼平と比べてしまうと義仲は途中途中で兼平を心配したり、巴に対しての行動も男らしかったのかという疑問な所もあったので、カッコいいとは思いませんでした。

B義仲は、「人間らしさ」「男らしさ」はもっているが、大將軍としての「武士らしさ」をもっているかといわれると難しいです。〈姿〉や〈名乗る〉ことから形状は、立派な大將軍かもしれませんが、でも、最初は一人で自害をしたくないといたり、自分を守らずに兼平のことを心配したりという所から弱さがでて「武士らしさ」というものが欠けていると思う。

C「木曾の最期」を読み、私は義仲は兼平とは違う勇気があると感じた。現代の私たちの多くは最後まで武士らしさを通した兼平を高く評価すると思う。なぜなら現代の私たちがこの場に遭遇したら兼平のような行動はできず、義仲のような行動をする可能性が高いからだ。私も最初は兼平の生き方を高く評価していたが、時代の背景も含めて考えると、家来である兼平の前では絶対に強くあらねばならず、自分自身のことを考えるべきであるのに、兼平のことを思い、行動した義仲の生き方も素晴らしいと考えた。

D人は弱い所もあるだろうし、くじけるときも絶対一度はある。だから「人間らしさ」という元から人に備わっているものは決して否定してはいけない。しかし義仲が生きた時代はそれを否定し、「武士らしさ」という強さが当たり前の時代。弱さを見せた義仲に対しての兼平はあたかも義仲が間違っただけの考え方をしているように述べられている。しかし、最大の危機に陥った際、「武士らしさ」という本来その時代ではなくてはならないものを捨て、「人間らしさ」がでたという義仲は、やはり武士である前で人間であるのだなと私は思うし、それって人として普通だと私は思う。

E義仲は敵にすきを見せるという大將軍らしさを欠いた行動をしていて何かもったいない死に方だったなあと思いました。敦盛の最期と比較すると敦盛と兼平は最期まで武士らしさを貫き通したが、直実と義仲はためらって、相手を想い、武士らしさというより人間らしさの方が勝っているなと思いました。

Fこの文章が書かれた時代と現在の平成の時代との時間の差があることによって、考え方や感

じ方が違うと思う。その当時では、武士は死に方までこだわり、死んだ後の事の名誉まで考えるという職で、兼平と共に死にたいと言った義仲は自害もできず、首をとられて死ぬというのは高評価ではないと思う。でも、現在では「情がある人間」として心優しい人としてとらえることもできると感じた。

A、Bのように義仲に対して否定的な評価を下したものがあるが、多くはある「らしさ」に徹することができなかったこと、はみ出してしまったことに対するもの。

C～Fのように義仲を擁護する意見も見られる。そこでは「武士らしさ」に対抗するものとしての「人間らしさ」をあげ、「武士らしさ」が必要であったと譲歩しながらも「人間らしさ」を選んだ義仲に好意的なものである。¹⁰ また、学習者の感想の中には波線で示したように、ある特定の時代と現代とを明確に分けて意見を述べるものが多く出た。¹¹

課題2についての回答については、以下の通り。

A自分の属性にあった女性らしさや安田生らしさを強いられることは、これまでとても不快なことだったけど、木曾の最期を読み自分に与えられた○○らしさをつらぬいて生きていくということは、とてもかっこいいことだなと思い、これからは○○らしさを大切にしていければいいなと考えました。

B「らしさ」とはその人の個性を表すものだと思う。私のまわりにある身近な「らしさ」は女らしさ。しかし、私は女らしくない。私は「らしさ」だけが個性だと思わない。「らしくない」もその人の個性だと思う。したがって、私の個性は「女らしくない」ということになる。「らしくない」が私の個性なら、その個性を受け入れ、らしくないなりに生きてゆこうと思う。

C私はらしさというものから抜け出すことはできないと考える。つまり、一つのらしさから抜け出しても数多くあるらしさのうちの一つのらしさに必ず属していると思う。だから自分が持っているたくさんのらしさの中から状況をよく見て、その時その時に適したらしさを選択して行動したいと思う。

D私はたとえば、「高校生らしい」ということを挙げるのであれば、その○○らしいに支配されながらもそれによって行動を選択していると思います。高校生らしくしなさいと言われてたら、高校生だからって…と思うことがあるけれど、高校生らしい行動を選ぶことで中学生とは違った考え方を持ったり、成長していくんだろうと思います。また、○○らしいは個性を作ることがあると思いました。○○らしいと言われてたら、私はこう思われているのかということが分かり、それを自分の個性だと思うことでその人がつくられていくんだと考えました。しかし、時にはそれが苦痛になってしまうこともあると思いました。

E私は今「アイドルらしさ」について毎日のように考えています。先週一週間、私の大好きなAKB48にはいろいろなことがありました。峰岸みなみちゃんのお泊まりデート報道。恋愛禁止のAKB48にはあってはならない規則破りなことです。でも、みーちゃんはアイドルである前に20歳の一人の女性です。特にみーちゃんは中高生時代の青春をAKB48に捧げた

子です。でも、恋愛禁止のAKB48に入りたくて入ったのはみーちゃん自身です。ファンの人たちからはいろいろな意見がありますが、〈アイドルらしさ〉と〈人間らしさ・女の子らしさ〉は隣り合わせなんだと思います。それを調節するのが難しく、たまには失敗してしまうのが人間なんではないことではないでしょうか。

Aは「らしさ」を肯定していくもの。問題としては、その「らしさ」を批評することなく受け入れる危険性があることである。Bは社会に通底している「らしさ」を反転させ「らしくない」ことを一つの個性として受け入れていくもの。興味深い意見ではあるが、これもいわば『らしくない』というらしさにまとめられるため、結局はAと同様に「らしさ」を肯定している。

Cはひとは「らしさ」から逃れることができない前提であるが、置かれている状況を見ながら意識的に選択していくというもの。DもCと同様に「らしさ」に支配されているという認識であるが、「らしさ」に縛られることでひとを没個性的なものにさせるのではなく、自分を成長させるものとして捉えている。ただし、「らしさ」は選択できるようなものとできないものがあるのではないかと、つまり、意識的にキャラとして演ずるための「らしさ」は確かに用いることはできようが、そうではない「らしさ」もあるのではないかと、という点は指摘した。

Eの内容は時期に合っていたものであり、アイドルのスキャンダルにまつわるものと絡めていた学習者の意見である。「アイドルらしさ」と「人間らしさ・女らしさ」とがあり、仕方のないことではないかというもの。これを読ませた後、授業ではこのEの学習者の課題1を読ませた。

最初は名乗ったり格好が武士らしく、巴を逃したのは自分の名誉のためであったという点や、鎧が重たいなどと嘆いたり、最期に死ぬ時は兼平と一緒に死にたいと言うなど、人間らしさも大いにある。でも、最期は深田にはまって敵に殺されるなど、あまり武士のような完璧さが欠けていると思う。私は義仲をへたれでダメ人間だと思った。

学習者が書いたこのアイドルの構造と義仲の構造はアナログ的な関係である。つまり、義仲が「大將軍（武士）らしさ」と「人間らしさ」に揺れていたことと、アイドルが「アイドルらしさ」と「人間らしさ」に揺れていたことが構造として似ている。似ているのに、義仲へは批判的な意見であり、この点についてこの学習者に問かけると、学習者はアイドルと義仲との共通点を理解した。その後、両者の違いとしてEの波線部について「アイドルの場合は自分から選んだが、義仲の場合は大將軍であることは選択できたのか」とコメントをした。

学習者自身を生活の中で束縛しているもの、行動や発話に影響力を与えるものを例に挙げさせて義仲と同じような構造にあることに気付いた学習者は、義仲に対して同情的な評価をしている。逆に、「らしさ」から抜け出ることがその人間の弱さにつながると考えている学習者は、義仲に批判的である。全体的には、義仲を擁護しており、次時の「らしさ」考の記述をみても、「らしさ」に囚われすぎず人間のあり方を自身のことと重ねている学習者が多く見られた。

3 「らしさ」考

授業終了後、「らしさ」考を学習者に書かせ提出させた。以下は代表的なものである。

私は、生まれた時から女性です。だから、小さい頃は、母親にスカートをよくはかされてい

ました。でも、スカートは動きにくく、何かと不便な格好で、木登りするのにもやっかいで、親には「女の子は木登りなんてしないだよ」と言われていました。けれど、どうしてもやっかいなスカートがいやになり、基本的にズボンでいることが多くなりました。母は、きっと、母の中にある「女の子らしい服」を着て「女の子らしく」いてほしかったんだと思います。私はその時は「女の子らしさ」にしばられるのではなく、単にスカートが嫌だっただけですが、もう少し大きくなってから「女の子らしく」するのも面倒になってしまいました。けれど、「女の子らしく」するのが嫌でも、今は結局「制服を着なきゃいけない」というきまりに従って私は今スカートをはいています。はかなければいけないから、はいています。本当なら、一日中パジャマでいたいです。でも、「学校に行く」という行為をするためには、「制服のスカートをはかなければならない」というきまりがあります。誰かがいちいちうるさく言っているのではなく、暗黙のきまりとして存在しています。

何が言いたいのかというと、誰かから、押しつけられ強制される「らしさ」に、私達は拒絶反応を起こします。でも、社会の中にある、文字で書かれてないきまりとして存在しているものは、年を取るにつれてあたりまえになっています。でも、2つとも内容としては「らしさ」についてなので同じです。私たちの中にとけている、あたりまえに化けた「らしさ」は、気が付かないうちに、私たちを「らしく」するのだなと思いました。

これまで「らしさ」について深く考えたことはなかったので、授業をとして新しい見方や考え方が見つかった。「～らしさ」として一番耳にするのは「自分らしさ」だと思う。でも、「自分らしさ」って何だろう？と私は思う。「自分らしくいる」というのは良いことだと言われるが、何が「自分らしい」のか分からない。仮に何が「自分らしい」のか分かっていたとしても「自分らしくいる」ことが正しいという理由はないと思う。「自分らしさ」が何なのか分かっていて、「自分らしくいよう」と思う段階で、私はその「自分らしさ」は勝手に決めつけているだけではないのかと思う。「自分らしさ」という型で、自分という人間を固定してしまうのではないだろうか。「自分らしい」と思っている部分は、ある程度の理想が含まれているのではないかと思うし、それは決して自然な自分ではないと思う。だからといって「自分らしさ」とは何なのかという問いの答えは分からない。というより、答えはないと思う。今回の授業を通していろんな人の意見が聞けて、「らしさ」について考えを深めることができた。

「らしさ」って何だろう。そう考えた時に私はあることを思い出します。中学の時、私は部活の友達やクラスの友達に対してずっと明るくにこにこしていました。明るいいじられ役。そう思われていて、多分それがみんなから見た「私らしさ」だったと思います。でも、実は家では全く違った役です。反抗期真っ只中で親や弟によく怒りをぶつけていました。多分それが家族から見た「私らしさ」です。でも、一人の時はたくさん悩んだり、反省もほんの少ししていたわけで、これも「私らしさ」になります。

では、この三つの中のどれが本当の私らしさだったのか。正直、全部です。私は「らしさ」は二種類あると思います。社会から見た「らしさ」と自分の心にある「らしさ」。それがプラスなことであろうとマイナスなことであろうと、この二種類でたくさんの「らしさ」で『自分』というのが形成されていくのではないのでしょうか。

人は相手を褒める時にもけなす時にも「〇〇さんらしいね」と言うことがあります。その人

から見た相手の「らしさ」はそうかもしれないけれど、その相手やまた違う人からしたら「らしさ」ではないかもしれません。「らしさ」って目に見えないし、すごく難しいものです。ただ私は、「らしさ」って正解とかないのではないかなと思いました。

私は「らしさ」について、今まではだいたいのイメージがあって、それに当てはまるとその「らしさ」になるんだと思っていました。

しかし「敦盛最期」、「木曾最期」を読んで少しいメージが変わりました。武士らしさというものから外れてしまった義仲は、今までの私ならば「武士らしくない」で終わってしまっていたと思います。でも今は、「武士らしさ」を外れると「人間らしさ」に変わるんだと思います。だから私は、これまでの授業から「〇〇らしさ」から外れてしまっても結局はそれが「△△らしさ」へと変わり、「らしくない」ということはないんだと思います。さらに「自分らしさ」って何だろうと思っていましたが、これも何となく分かったような気がします。「高校生らしさ」や「女らしさ」、これには何となく想像がつかますが、「自分らしさ」って？ それは「高校生らしさ」、「女らしさ」、これらを含めたいろんな「らしさ」を兼ね備えて「自分らしさ」になるのだと思います。その人その人によって持っている「らしさ」が違うと思います。だから「自分らしさ」というものが出来上がるんだと思いました。これまでの授業で「らしさ」についてたくさん考えたけど、習った「らしさ」だけではなく、他の「らしさ」について考えることもできたし、最初に疑問に思っていた「自分らしさ」についても少し、自分の考えが持てるようになったので、良かったです。

私は今回平家物語を通していろいろ考えた。母から「高校生なのに」とか「高校生らしくない」とよく言われる。でも、私にとってそれは締め付けられるようで窮屈、苦痛だと考えていた。あらためて考えを変えてみると母も悪意があってそう言っているのではないと感じた。人間は「らしさ」という囲いの中で他人を見ることでそこからずれているところを指摘する。それが社会全体のルールでもあるのだと考える。しかし、いくら人から言われるからといって必ずしもすべての人間が従うわけではない。その選択で人間は「らしさ」、つまり個性を持つていく。

たとえば、世界のみんが「らしさ」に締め付けられていたら、個性がなくなりおもしろみがなくなる。高校生だけど、たまには中学生みたいなことをしてみたくなるし、女だけど男っぽい人もいる。それは「らしさ」を選択してそれを自分の個性としてきたからだと考える。また、人は「らしさ」を他人に向けることでその人を理解しようとする。あの人は天然だからおっちょこちょいとか、オカマだからあんな喋り方なのかとか。他人を「らしさ」の枠に入れることで理解したがる。

しかし、私たちは人から「～らしい」と言われたら、「そうか、自分はこういう人間なのか」とそれを個性として捉えている気がする。自分で「らしさ」を選択しつつ他人からの視線を含めて個性ができ、その人がつくられていくんだと考えた。「らしさ」は締め付けられるものでもあり、時には苦痛だなど感じることもあるが、それによって自分自身がつくられているということと同時に感じることができ、これからも一緒に生きていきたいと思った。

4 今後の課題—作者との対話、メタレベルでの批評

「らしさ」考の完成の後、次のような課題を与えた。その後の引用は学習者の回答である。

課題 『平家物語』の作者は、義仲や兼平（木曾の最期）、直実や敦盛（敦盛の最期）を書いたわけですが、これらの人物を書くことができた作者の中には、一体どのような人間観（人間に対する考え方）や武士観、世界観や社会観があったのでしょうか。

武士は強いと思われていた時代の物語にあえて人間らしく武士の視点からすると弱い義仲や直実を作者は書いている。私的には作者は作者が生きた時代に何らかの違和感があったのではないかと思う。人間らしい感情的な二人に対して、殺すしか、もしくは殺されるしかなかった状況にした社会との差のようなものを作者は書き、訴えたかったのではないかと思う。

とりあえず、武士に対して尊敬の思いばかりの感情ではないと思う。尊敬しているなら、義仲の失言や失態をあえて書かない気がする。でも、「敦盛最期」では悲しみながらも武士として敦盛を殺す直実を描いている。だから、武士のすべてを否定しているのではなく、一人の武士という人間を束縛する「武士としての在り方」に対して、その武士を武士ではなく人間として見た時に、その武士の葛藤を一般的に正しくないとする社会に訴えていると思った。

このような課題を与えたのは、あらゆるテキストにはその書き手がいるという事実を再認識するためである。評論文や、古典作品でも『枕草子』や『徒然草』、『更級日記』などの随筆や日記文学では「作者の意図」が問われることがあるが、小説教材や作者が未詳・不詳のテキストでは不問に付されるように思われる。¹²

また、今回の「木曾最期」でいえば学習者の意見にもあったように、義仲の武士としての失態を書かずにすむこともできたはずであるが、そのようにしなかった作者の中には、どのような世界観や人間像があったのかを問う狙いもあった。義仲の評価や「らしさ」について考えることはもちろん重要である。しかし、さらなる学習の目的としては、このような叙述ができる人間の中には、一体どのような思想や世界観があり、それを叙述しているのかを考えていくことである。このことは今回の授業では深くは問えなかったが、今後の課題として残しておきたい。

5 おわりに

本稿で引用した学習者の興味・関心や学習者の中で解消できない問題として、「自分」という存在の捉え方がある。「らしさ」というキーワードで授業を展開したのも、自己を考えていく中で重要となると考えたからである。

今回はいわゆる定番教材を扱ったが、こうした長年親しまれている古典教材でも学習者の今に関わる問題を切り拓いていけることができたというのが一つの成果である。古典と学習者との隔たりは依然として存在しているし、これからも広がっていくであろう。この問題は、音読や暗誦だけでは解消されるはずはないし、逆に古典の世界と今の世界とを安易に結びつけることで解決できるわけでもない。伝統に向き合うこととは創造しながら更新していく営みのことである。古典テキストという他者と、書き手という他者、そして自己という他者に向き合いながら対話していく場としての古典の授業を今回は意識して実践した。テキストの差し出す問題領域へ学習者を導くことが十全であったとはいえないが、今後も課題を踏まえて古典と学習者との易しくはないつながりをつくっ

ていきたい。

注

1 これは生徒だけではなく、我々教員には「教師らしさ」、親には「親らしさ」が求められている。「親らしさ」について附言すれば、近代においては親の教育力などは問題とされなかったが、現代では「良い親」であろうとする雰囲気になっている（広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』講談社、1999年、広田照幸『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会、2001年）。書店で親の教育力を煽る書籍や雑誌が多いのも一つの証左である。

2 本稿中では「らしさ」を社会学のいう「言説」とほぼ同義で用いている。したがって、本実践は「言説」とどのように向き合っていくかを考えるという狙いもある。授業においては「言説」という用語を使用するより、馴染み深い「らしさ」を用いることで学習者が使いやすいように留意した。

3 本稿では「武士らしさ」としているが、これは正確ではない。厳密には「平家物語の武士らしさ」である。我々の抱く武士像は近世の、あるいは現代の時代劇ドラマをイメージするかもしれないし、『平家物語』の描く武士は、当時様々にいたであろう武士の最大公約数ではないし、『平家物語』の語り手が産出した武士があるのではないかという疑念もあるからである。ただ、本稿では如上の理由はあるが「武士らしさ」と使っている。

4 都築則幸『『平家物語』「木曾の最期」教材化の変遷—戦前から現在に至るまで—』（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』20号-1、2012年）

5 このあたりの事情については、ハルオ・シラネ・鈴木登美編『創造された古典』（新曜社、1999年）、高橋亨・小嶋菜温子・土方洋一『物語の千年』（森話社、1999年）など参照。また、『平家物語』に関わっては高木信『「死の美学化」に抗する—『平家物語』の語り方』（青弓社、2009年）、立石和弘『『平家物語』の自死の身体』（高木信・安藤徹編『テキストへの性愛術』森話社、2000年）などもある。

6 自己論、他者論では鷺田清一「わかろうとする姿勢」（『探究国語総合』桐原書店）、鷺田清一『じぶん・この不思議な存在』（講談社、1996年）を中心に読み解いた。またこの議論に関わる問題として心身二元論や心についても扱った。言語学では田中克彦『言語学とは何か』（岩波書店、1993年）、ジェンダー論、社会構築主義については中村桃子『〈性〉と日本語』（日本放送出版協会、2007年）。他、ジェンダー論に関わる教材としては、12月に古典の授業で『伊勢物語』の「梓弓」を扱った。

7 なお、「敦盛最期」は教科書に採択される場合、「狂言綺語のことはりといひながら…」という箇所は省略されることがある。これがあることによって直実の武士と親との間の葛藤を仏教言説によって回収している（この問題については菊野雅之「「敦盛最期」教材論—忘却される首実検と無視される語り収め—」『国語科教育』第65集、全国大学国語教育学会、2009年参照）。このことも教室で考えるべきことであるが、今回の実践と絡めてしまうと学習者に混乱を招くかと考えられ、今回は割愛したテキストを読ませることにした。

8 ただし、ある生徒は「一見武士らしさから発言しているように見えるが、その裏には男として人間として巴を守りたかったから」という発言をしている。ここには「らしさ」を一面的には捉えない学習者の姿が見られる。

9 教科書の脚注の巴の説明には「生没年未詳。木曾義仲に仕えた女武者。義仲に愛され、木曾から京都へ義仲につき従った」（傍線、稿者）とある。そして、現代の映画やドラマでは「愛する女性を守る男」というのはよくありがちである。このようなことから、学習者は義仲が巴を逃がした理由を自分に理解しやすいものに置き換えたのであろう。

10 「人間らしさ」という言葉はわかるようでその中身はかなり曖昧なものである。人間に本来備わっている当然あるであろう感情や思想とでも理解されようが、社会構築主義の立場からは、このような「人間らしさ」を「本質主義」と見なし、批判していくであろう（ヴィヴィアン・バー、田中一彦訳『社会的構築主義への招待』川島書店、1997年参照）。今回は、義仲の兼平に対する感情やその発露を「人間らしさ」からもたらされるものだと考えているようであるし、稿者としても他に言葉が見当たらず便宜上「人間らしさ」と使っていた。

11 これは、古典の時代のものの見方や考え方と現代のそれとでは、基本的には一緒にすべきではない（安易につながりを求めない）という古典観を意識的に指導してきたことが一因であると思われる。

12 このような書き方をすると、テキスト論や読者論以前に回帰しているのではないかという批判はあろう。テキストの言葉は作者のオリジナルの言葉ではないし、他のテキストの引用でもあるだろうし、作者の思わぬ意味を読者が創造していくこともある。それでも、実際に誰か人間が書いたものであり、その人間が何を考えたのかを問題にすることは不毛ではないという信念からこうした書き方にしている。

付記

今回の実践報告は、広島大学の竹村信治教授、間瀬茂夫准教授、広島県立五日市高等学校の小路口真理美校長の三氏を講師として、広島県の高等学校の国語科の教員がともに議論をしながら古典教育を考えていく国語科授業改善セミナー（年3回）で協議した上での稿者の研究授業がもとになっている。古典をア・プリオリに価値のあるものとは見なさず（つまり、伝統文化であるから古典を学ぶべきだとか、日本人の価値観が体现されているから大切だ、という学習者の今と関わらない、あるいは授業者が関わらせようとしない授業はしない）、古典テキストや作者の問いかけた問題領域を引き受けた上で学習者自身が授業の中で新たな価値を創造し、対話し、ひいては古典をリスペクトすることが目的としてある。

三人の先生方をはじめ、他の先生方との真剣な議論があつての今回の授業であった。ここに記して、感謝申しあげる。

（安田女子中学高等学校）